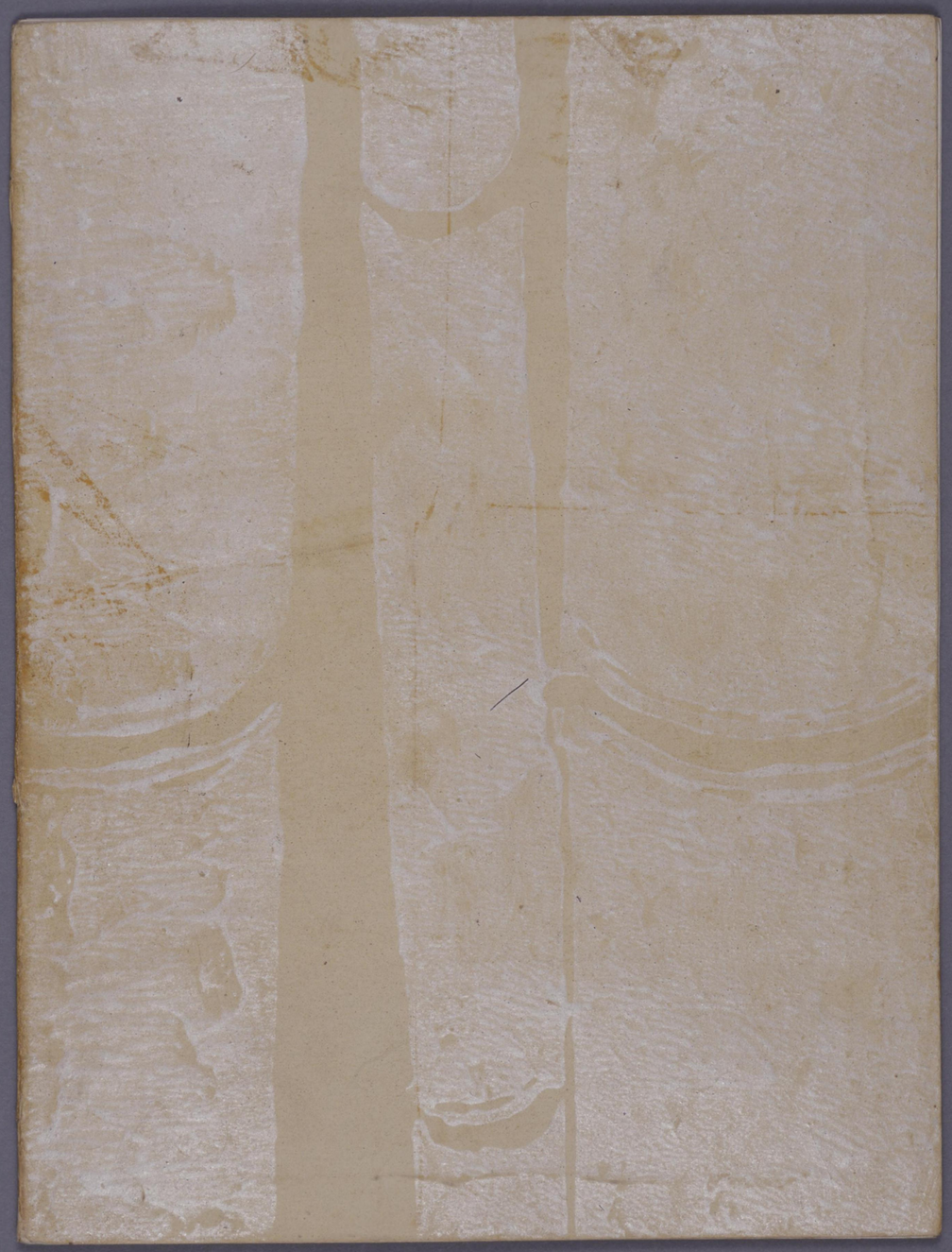

道成寺

国立国会図書館

詞

是ハ紀州道成寺乃住僧にて候
さても當寺にをいてさる子細
あつてひさしく撞鐘退轉
仕て候を此ほと再興仕つて鐘を
いさせて候けふハ吉日にて候
程に鐘乃供養をいたさはやと
存じ候いかに能力がりやり[illegible]

書
17.10.-6
国会図

国立国会図書館

鐘樓へあげてあるか（ワカヰ）さん候
早鐘樓へあけ申て候
（ワキ詞）今日ハ鐘乃供養をいたさふずる
にてあるぞさる子細ある間女人
禁制にて候かまひて一人も
いれ候ふな（ミ上次才）〽畏て候
候見もきこえぬ面しく[illegible]

供養に參らむ（上）これハ此國の
かたほとりに住白拍子にて候
（詞）さても道成寺と申所に鐘の
供養の候よし申候ほどに
たゞいま參りやとおもひ候
（上三の）月ハほとなくいりしほの
けふりみちくる小松原いそく

さゝ路ハのまゝゝ紀ぬ゛ひたか乃
寺に着にけり〱　〽なふ〱
女人禁制にてハほとに供養乃
場へまかり度候まし以てうひて
うんゝ紀くん　〽是ハ此國の
かたはらに住白拍子にて候
鐘の供養にて候ほと舞を舞候へし
供養をおかませて給り候へ
〽是ハ又たゝ今女人にはかり候
やハ罪そうとひとに乱やて候見う
けるにてハ清まちく以りに
清同者ち出も紀をや作為し
〽けすう　〽女人禁制と仰らる祝ん
ほとに某付んとて給り

こ紀國乃傍紀白拍子にて候はゝの
そと供養をおこなはれて候よ
きあらそ供養有鐘をまはふ
けるよし申候はゝのう候紀清候
まゐらうと清堀へいまし候く
りし
ワキツレ いや〳〵かたく禁制乃由
おほせとく候は程にかなひ候しハ
なれましひかさは ヲカシ あらうれしも
なやはなみしそとうかしひて
くく左中く女人ハ叶ふましき
由候く我くとも鐘を面白う
清舞んはく舞か心まてそうと
堀へへやさふれるりては
シテ詞 恙嬉しや源に鐘をまひは面し

うれしやさらはまはんとて
あれにましますみやひとの
ゑぼしをしばしかりにきて
既に拍子をすゝめけり花乃
ほかには松ばかりくれそめて
かねやひゞくらん道成乃卿
うけたまはりはじめて伽藍
たちはなのどうじやう興行の寺
なればとて道成寺とは名づけ
たりやまでら乃春乃夕暮
きてみれば入逢の鐘に花ぞ
散りける〳〵去程に〳〵
寺ゝのかね月落鳥啼て霜ゆき
天にみちき潮程なくひたかの寺

寺乃江村於漁火愁にたいして
ひと〱ねふれハよき隙そと
立まふやうにてねらひよりて
撞かんとせしか於もへハ此鐘
恨めしやとて龍頭に手を掛け
飛とそ見えし引かついてそ
うせにけり

ワキ詞 言語道断不様乃

候をあてこう望ハ女人禁制乃
よしや申候ハ小出事にてある
だよく皆くなりやたわゝく
ごゝ於鐘乃り川りて女人禁制
申候處いりて種乃山を存へ之の

ワキツレ いやなる世存させは 半 まゝゑ
き調を語候てきゝのさ申は悪し

国立国会図書館

〽[illegible]ゝ語りても語かたるまじく
〽昔此所にまなご庄司といふ　拍子
者あり彼者一人の息女をもつ
〽又其比奥より熊野へ年まふて
する山伏のありしが庄司が本を
宿坊と定めいつも彼所に来りぬ
〽庄司娘を寵愛のあまりにあの
客僧こそ汝がつまよおつとゝ
なんどゝたはふれしをばおさな
こゝろにまことゝ思ひ年月を
送る又ある時は客僧庄司が
もとに来りしかば女夜ふけ人
しづまつて後客僧の閨にゆき
いつまでわれをばかくて置給

給ふぞいそぎむかへたまへと
申しゝかハ客僧おほきにさハき
さあらぬよしにもてなし夜に
まぎれ忍ひ出て此寺に来たり
ひそかたのむよし申しゝかハ
隠すへき所なけれハ撞鐘を
おろしそのうちにこの客僧を
かくしをけりさてハ女ハ山伏を
のかれましとて追つかくる折節
ひたか河の水以ての外に増りしかハ
河の上下をかなたこなたへ走
まハりしか一念の毒蛇と成て
河をやす〱と泳ぎこし此
寺にきたり爰かしこ尋ねしか

〽鐘乃おりたるをあやしめ
龍頭をくはへ七まとひまとひ
ほのほをいだし尾をもつて
たゝけば鐘ハ即湯となつて
つゐに山伏をとりおはんぬ
なんぼうおそろしき物語にて
ありて候

ワキ〽言語道断かゝる
おそろしき物語こそ候はね
〽其時乃女の執心のこつてまた
此鐘に障碍をなすと存候がまゝ
人乃行力もこのやまにたのしく
こうくへ漂ふいの法にて此鐘を
二度鐘楼へあくるはやと思ひ候は
ワキ〽むかへうる衆の候 ワキ上〽水のうへに法にて

国立国会図書館

ひたかの河原乃すなごハつくれハ
ぎやうじや乃法力つく
べきかと　ワキツレ　皆一同に声をあけ
ワキ　東方に降三世明王　ツレ　南方に
軍荼利夜叉明王　ワキ　西方に大威
徳明王　ツレ　北方に金剛夜叉明王
ワキ　中央に大日大聖不動うごくか
動かぬかさくけんじやく曩謨三曼陀
縛日羅南戦多摩訶嚕遮那娑婆
多耶吽多羅吒干鉾　聴我説者
得大智恵知我心者即身成仏と
今乃蛇身をいのる上ハ何乃
恨ミか有明乃　ワキ上　つきよりかねこそ音
上月
れハくうこほろ祈まさるゝ

ひけやかむて小千手の陀羅尼
不動の慈救の偈明王の火焔の
黒けふりを立てぞいのりける
いのりいのられつかねど鐘
ひゞきいでゝひかねどこのかね
をどるとぞ見えしほどなく
鐘楼にひきあげたりあれ見よ
蛇体ハあらハれたり
謹請東方青龍清浄謹請西方白体白龍
謹請中央黄体黄龍一大三千大
千世界の恒沙の龍王哀愍納受
あひみんせ自謹のみぎりなれば
いづくに大蛇のあるべきぞと
祈（つのこ）祈られかつぱとまろふり

国立国会図書館

またおきあかりてたちまちに
かねにむかひてはくいきは
猛火となつてその身をやく
ひたか深河なみ深淵に飛てそ
いりにけるのそみたりぬと
験者たちは我本坊にそかへりける
くはく

国立国会図書館

国立国会図書館